

聖書：マタイ 3：1～12

説教題：悔い改めの福音

日時：2016年4月17日（朝拝）

ここに出て来るのはバプテスマのヨハネという人です。4つの福音書はいずれもイエス様の公の生涯の前に、まずヨハネが現われて先駆者としての働きをしたことを記しています。3節にイザヤ書の預言がこのように引用されています。「この人は預言者イザヤによって、『荒野で叫ぶ者の声とする。《主の道を用意し、主の通られる道をまっすぐにせよ。》と云われたその人である。』」 今日もそうですが、ある国の偉い王がやって来るとなると、その地の人々はできるだけ王がスムーズにこの地に来れるように、あらゆる努力をしてその準備をします。時には山道を切り開き、でこぼこ道を平らにし、うねった道を真っ直ぐにした専用道路を作って、その到来を心から歓迎します。そのようにヨハネはまことの王イエス・キリストの到来に備えて道備えをする人。人々の曲がった心を、救い主イエス様がスッと入って来れるように、真っ直ぐ整える働きをする人です。

彼の出現は非常なインパクトを当時の人々に与えたようです。まず彼は久しぶりにイスラエルに与えられた預言者でした。旧約聖書の最後はマラキ書で終わっていますが、彼が働いたのは紀元前400年頃でした。その旧約聖書から新約聖書の間には400年間の沈黙時代があります。その長い400年間の沈黙を破って、いよいよ救い主が現れようとする直前に、この預言者が与えられたのです。彼のことがここで「叫ぶ者の声」と言われています。まさに神の言葉を宣言する力強い声が再びユダヤで聞かれ始めたのです。

彼が活動したのはユダヤの荒野でした。栄えている町の中心で、ではありません。エルサレム神殿で、ではありません。都会の華やかさとは関係のない所で、この活動は始まりました。4節に記されている彼の格好も、この世の豊かさとは対照的な質素なもの、シンプルなものです。振り返ってみれば、荒野は神がイスラエルを取り扱って来られた場所でした。イスラエルの民は40年間、荒野で神の導きを受けました。またモーセやダビデやその他の偉大なリーダーたちも荒野でしばしば時を過ごしました。そこは人間的な豊かさで目が眩まされることなく、一人で神と出会い、静かに神の御声を聞く場所でした。

そしてヨハネが与えたインパクトは、彼がユダヤ人にバプテスマを授けたことです。当時、異邦人がユダヤの宗教に改宗するためのバプテスマはありました。宗教的に汚れた者である異邦人が自分をきよめるためのものです。しかしヨハネは、すでにきよいと自負していたユダヤ人にこれを行なったのです。

その彼の第一声が 2 節に記されています。「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから。」 これはイエス様の宣教の第一声と同じです (4 章 17 節)。つまり今日見るヨハネのメッセージは、やがて見るイエス様のメッセージと本質的に同じということです。ですから私たちはヨハネは前座の人だからと言って、軽く考えるはならないのです。これはイエス様のメッセージそのものと言えるものなのです。

さて彼の第一の命令である「悔い改めよ」とはどういうことでしょうか。当時のギリシャ語でこの言葉は「考え方を変える」という意味で使われていましたが、聖書では単に考え方だけではなく、全人格的な変化、特に神に対する全人格的な方向転換を意味しました。これは前提として、生まれながらの私たちは神と正しい関係に立っていないということを意味します。神を無視して自分勝手に益々神から離れる方向へ進んでいる。そのことを認め、悲しみ、悔いて、神との正しい関係に立ち返ることです。この命令の理由が後半の「天の御国が近づいたから」という部分です。天の御国とは神のご支配が究極的に実現される世界のことです。この世の歴史はいつまでも今のまま続くのではありません。神は最後にこの世の悪を清算し、ご自身のみこころだけがなる正義の国を実現されます。そういう天の御国が近づいた。これはそれがもうここに到来し始めているという意味です。そう言えるのはなぜでしょうか。それは約束のメシヤがついに来たからです。この方が送られたということは、世界の歴史が最終段階に入ったことを意味します。聖書はイエス様が到来してからの時代を、「終わりの時代」とか「終わりの日」と呼んでいます。ですから残されている時間は非常に少ない。急いでやがての日に備えなければならない。そのために求められているのが、この「悔い改め」なのです。私たちはどうでしょうか。もうそこまで来ている最後の日を前にして、準備は十分でしょうか。神との関係は正しい状態にあるでしょうか。今の内に根本的に方向転換すべきということはないでしょうか。

ヨハネはさらにこの悔い改めについて語ります。5 節に、ヨハネのもとに全地域の人々が出て行って、自分の罪を告白し、バプテスマを受けていたとあります。そこにパリサイ人やサドカイ人もやって来ました。彼らに対するヨハネの言葉は厳しいものです。「まむしのすえたち。だれが必ず来る御怒りを逃れるように教えたのか。」 せっかく洗礼を受けに来た人たちに対して随分ひどい言葉ではないかと思うかもしれませんが、原文の7 節ではバプテスマを「受けに来た」とまでは書かれていません。「ヨハネのバプテスマのところに来た」と書いてあるだけです。ですからこれは必ずしも悔い改めてバプテスマを受けに来たという意味ではないと考えられます。むしろおおぜいの人々がヨハネのところに行くのを見て、その様子を見にやって来た。いずれにしろ、そこに正しくない心があるのを見て、ヨハネは厳しい言葉を発したのでしょう。「悔い改めにふさわしい実を結びなさい。『我々の父はアブラハムだ』と心の中で言うような考えではいけない。」と。アブラハムの子孫であることは大なる特権ですが、そのような外面的な特権によりかかっているはいけません。神が見ておられるのはそういう外側のことではなく、内側です。そして心で真に悔い改めている人は、必ずそれにふさわしい実を結ぶと言われていきます。心の変化は具体的な生活の変化に現れなければならないと。私たちもこの言葉の前に自分を吟味させられます。果たして私の悔い改めは実となって現れているだろうか。私の生活は私の悔い改めが本物であることを示しているだろうか。

10 節でヨハネは改めて事態は切迫していることをアピールします。斧もすでに木の根元に置かれている。さばきは今にでも実行されようとしている。従って良い実を結んでいないなら、今すぐにでも切り倒され、火に投げ込まれる。そういう時期にすでに突入している、と。ですから私たちは待たなして悔い改めに進み、それにふさわしい実を結ぶ者でなくてはならないのです。

さて、このようなハネのメッセージは一言で言えば「悔い改めよ」ということでした。自分が神の前に正しい状態にないことを認め、悲しんで、方向転換せよと。これは私たちにとって聞きたくないメッセージでしょうか。しかし聖書における「悔い改め」は暗く、否定的な事柄ではなく、むしろ真の祝福の入口となるものです。それは旧約時代からそうでした。私たちは元来の性質として悔い改めたくありません。自分が悪いと認めたくありません。むしろ自分を正当化し、今の状態を保ちたいと思います。しかしその路線を続けるなら私の人生は何も変わりませんし、

むしろその心は益々かたくなになり、神から見て悪の道を進み、やがてさばかれる者となってしまいます。しかし聖書が語る福音は、私たちが自分の罪を神の前で正直に認め、嘆き、告白する時、神は豊かに私たちをあわれんでくださるといことです。詩篇 51 篇 17 節：「神へのいけにえは、砕かれた霊。砕かれた、悔いた心。神よ。あなたは、それをさげすまれません。」そしてこの詩篇で語られていますように、神は私たちの罪を除いて聖めてくださり、きよい心を造ってくださり、救いの喜びに生かしてくださいます。自分の力ではどうしようもない私たちを、神が赦し、受け入れ、あわれみ、祝福してくださるのです。

ヨハネはこの悔い改めに立ち返るように！と人々を招いています。そして彼は罪を告白する者に水のバプテスマを授けていました。これは何を意味するのでしょうか。水は汚れを洗い流し、きよめる働きをします。つまりこの水のバプテスマは、神によってその罪が洗われたことを象徴するのです。マルコの福音書やルカの福音書を見ると、ヨハネのバプテスマのことが「罪が赦されるための悔い改めのバプテスマ」と言われています。つまりこの悔い改めを通して、洗礼を受けることによって、その人は罪を赦されるという恵みを神から受けるということの意味します。私たちは自分で自分の罪をどうすることもできませんが、悔い改める者の罪を神が赦して下さる。従ってその人はやがてのさばきを免れる者となりますし、神との正しい関係に回復されて神から来る新しい力によって良き実を結ぶ者になります。そして天の御国の祝福に生きる者となるのです。このように悔い改めは神の大きな祝福に生きる秘訣なのです。

そして彼はイエス様を指し示します。神が罪人を赦し、きよめることができるのは、このメシヤのゆえです。ヨハネはその方こそ私にはるかにまさる方であり、聖霊と火とのバプテスマをあなたがたに授けてくださる方であると言いますこの「聖霊と火とのバプテスマ」はどちらも旧約聖書で言われてきたことです。聖霊の祝福についてはたとえばエゼキエル書 36 章 26～27 節でこう言われていました「あなたがたに新しい心を与え、あなたがたのうちに新しい霊を授ける。・・・わたしの霊をあなたがたのうちに授け、わたしのおきてに従って歩ませ、わたしの定めを守り行なわせる。」(またヨエル書 2 章 28～29 節参照)。一方の「火」は私たちの罪をきよめる働きのことを言っているのでしょうか。やがて神は火を送り、民を精錬して汚れを取り除き、純粹にすると旧約聖書に言われていました。この祝福は、メシヤが地

上に来て私たちを救うための御業を成し遂げてこそ、すなわち十字架と復活の生涯を経てこそ、真に注ぐことのできるものです。そして実際、この成就が使徒の働き 2 章のペンテコステの記事に記されています。まさに聖霊と火とのバプテスマがその日、天から注がれました。そしてその日以降、イエス・キリストはこの祝福をもって世界を導いておられます。そのような方が来る！ということをヨハネは指し示しました。神に立ち返る者を、神はこのメシヤのバプテスマによって豊かに満たし、祝福してくださいと。

しかしこの招きに従わない者は恐ろしい報いを刈り取ることになります。最後の 13 節に、やがて来られる方は手に箕を持っておられ、ご自分の脱穀場をすみずみまできよめられると言われています。麦は倉に収めるが、穀は消えない火で焼き尽くされると。この方を退ける者にはもはや救いはなく、その人は自分の罪に対する厳しいさばきを刈り取らなければならないのです。

私たちはこのヨハネのメッセージの前にどうでしょうか。今から 2000 年前の彼の時代でさえ、天の御国は近づいた！と言われました。としたなら、今の私たちは益々そうではないでしょうか。ある人はあれから 2000 年も経っているのに、まだ世の終わりが来ていないから、ヨハネの言葉は真実ではないと言うかもしれません。しかし先に見たように、救い主が遣わされたということは、神のご計画においては歴史の最終局面に入ったことを意味しています。しかも今やイエス様の地上の働きは成し遂げられ、イエス様は天に上げられ、そこから聖霊を注がれたなら後は残されているプログラムは最後の再臨だけです。それはいつ起こってもおかしくないという意味で最後の日は近いのです。天の御国はもうそこまで来ているのです。私たちの準備は大丈夫でしょうか。

今日見て来たヨハネの言葉は悔い改めの福音です。大いなる祝福への招きです。このメッセージを無視し、自分を変えることを拒み、今の状態を保って歩むところに私たちの本当の幸せはあるでしょうか。そこにあるのは益々頑なな人間となり、罪の力に振り回され、最後にさばきを刈り取る歩みではないでしょうか。しかし自分の罪を神の前で認め、あわれみを請い求めるなら、神が私たちの罪を赦し、聖めてくださいます。私をご自身との正しい関係に立たせ、キリストによる聖霊と火とのバプテスマによって大きな恵みの力に生かしてください。私たちはこの招き

に従いたいと思います。悔い改めは祝福への道です。ただ神の恵みによって新しい心と力を頂いて歩む人生のスタートとなるものです。私たちはこの招きに従い、悔い改めのドアを開け、キリストにある救いをいただいて、天の御国の祝福に生きる者へ導かれたいと思います。